

# ヒトエグサ養殖指導

## 1. はじめに

八重山地域においては与那国島を除きヒトエグサは豊富にあり、昔から一般家庭で広く利用されている。また簡単にパック詰めした製品がスーパーなどの店頭に並んでいる。しかし、洗浄、乾燥課程での処理がまずく砂が混入したり、見た目にも悪く、いい製品とはいえない。

そこで、八重山漁協のいくつかのグループが5年前から名蔵湾において養殖に取り組み始めた。しかし、彼らの漁業形態が冬場に繁期となる潜水器漁業を主としていたため、網の管理等がうまくいかず、製品にするまでに至らなかった。

60年度から、主に一本釣り漁業を営む26～31才の若い漁業者5名がヒトエグサ養殖研究グループを結成し、ヒトエグキ養殖に取り組んでいる。彼らは親と一緒に一本釣り漁業を営んでいるが、天気が悪く出漁日数の少なくなる冬場に、何かいい収入源となるものはないかと、ヒトエグサ養殖に取り組んでみることになった。

## 2. 目的

60年度は150枚の網を天然採苗し、うち種付きのいいものから75枚を本張りした。しかし、網の洗浄を若干怠ったため、泥の付着、雑藻の繁茂がみられ、収穫は乾燥重量にして百kg程度にとどまった。

2年目の今年は収穫から乾燥までの課程を機械化し、網数を増やし生産量を増やす、さらに泥の付着、雑藻の繁茂を防ぐため網の管理を徹底する。そして管内漁業者へ、つくる漁業への意識改革を波及させることを目的とした。

## 3. 内容および結果

10月12日～22日の間に400枚の網を5枚重ねにして天然採苗法により網を張った。場所は前年度同様名蔵湾の名蔵小橋地先(図1)である。採苗の段階では前年同様、泥および藍藻A(図2-A)の付着がひどいので定期的にブラシでしごき、または陸揚げし定置網用のコンプレッサー付き洗浄機で洗浄した。

その結果、網自体はきれいに保つことができたが、洗浄し過ぎて種も洗い落とされてしまったようで種付きがまばらになってしまった。また12月から1月初めまで水温が比較的高く、生長が遅くなってしまった。

1月6日から30日の間に250枚を本張り。前述のように比較的高い水温が続いていたので、さらに藍藻B(図2-B)および藍藻C(図2-C)が付着しはじめた。1月17日、最も種付き、生長の良かった網(藻体の長さ4～5cm)を、自動刈り取り機の試験も兼ね、収穫開始。自動刈り取り機は藻体が短いとあまり有効でなかった。

1月中旬からの冷え込みで生長もよくなり、藍藻Bも目立たなくなってきた。(葉先につく藍藻

Bは水温が低くなると消えるようである。) しかし、藍藻Cは非常に強く、網のレベル操作、洗浄でも落ちなかった。結局藍藻が製品に混入してしまうためハサミで収穫するはめになってしまった。

洗浄、脱水、乾燥の課程を機械化したことにより、加工作業は非常に省力化できた。

製品は30gずつパックし、スーパーやお土産店等に出荷している。

今期は300kg(乾燥重量)の製品を製造した。

#### 4. 今後の課題

##### 採苗および本張り

当面は天然採苗で行う。採苗場所を何箇所かに分け、種付きが早く他の雑藻の影響を受けないようないい種場を選定する。そして、種付きの早い網から順次本張りしていく。採苗時期の洗浄は適度に行う。

##### 藍藻対策

藍藻Aは泥と一緒に付着するので洗浄によって落とす。

藍藻Bは水温が高くなりはじめたら出現するので、注意深く観察し、繁茂しないうちに収穫するようにする。

藍藻Cについてはその対策のための情報を収集し検討する。(酸性処理剤使用の検討)

##### 収穫方法

自動刈り取り機を有効に使い収穫回数を増やし、生産性を高める。

##### 販 路

まだまだ需要を満たしきれないくらいであるが、今後は安定生産に努めるとともに観光協会などにも働き掛け、養殖ヒトエグサをアピールしてもらい長期的な販路拡大を進めていく。

#### 5. 参考文献

1. 漁業者センター(1983): ヒトエグサ養殖の手引き
2. 諸見里聡・仲間勲(1985): ヒトエグサ養殖指導

『昭和59年度水産業改良普及活動実績報告書』

本稿に用いた資料は、主に「養殖場の位置」と「養殖場の位置」に関するものである。本稿は、養殖場の位置を明らかにし、その位置を明らかにするものである。

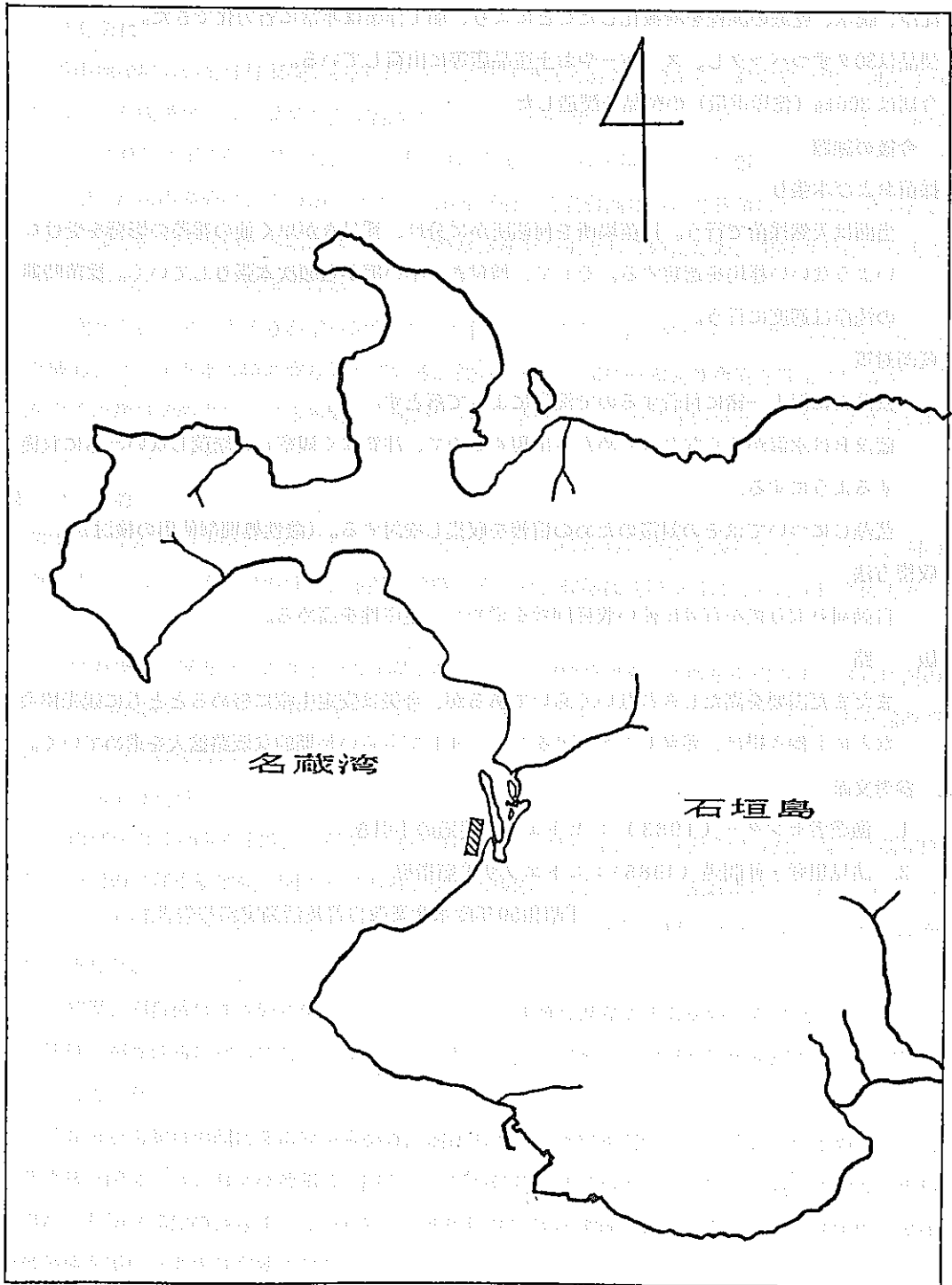


図 - 1 養殖場位置



図 - 2 - A 藍藻A (泥と共に付着する)

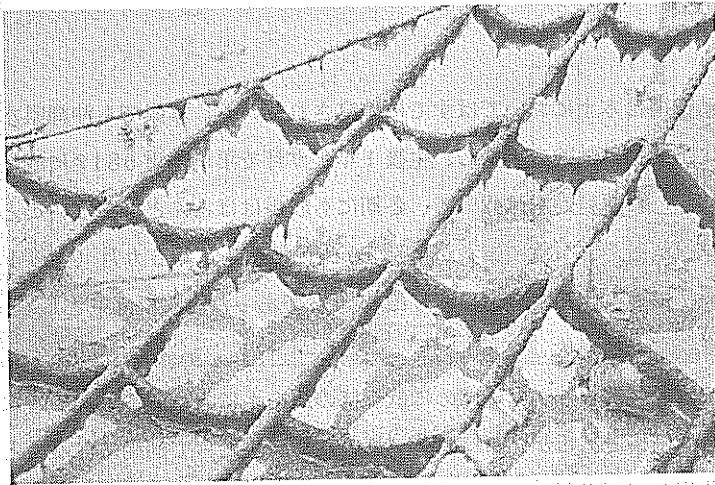


図 - 2 - B 藍藻B (藻体の先に付着する)

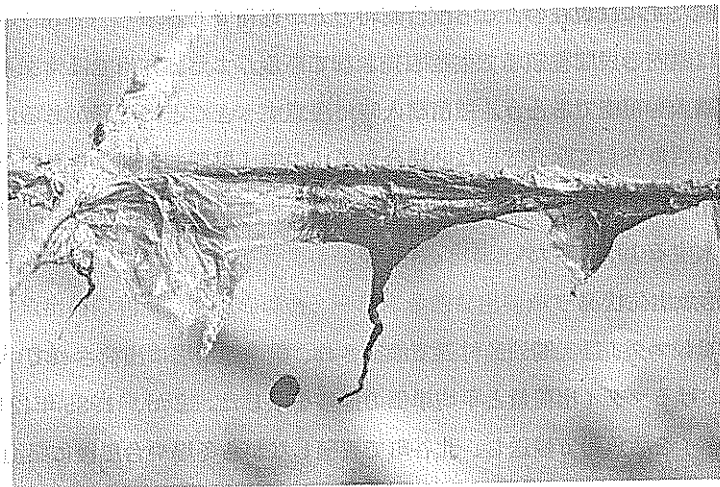


図 - 2 - C 藍藻C (採苗の時に網に直接付着する)